

しその意識の全體系に於ける地位を明にし以て宗教の眞理性妥當性の問題を解決しやうとする宗教認識論との完全なる綜合でなければならぬ。宗教心理學は宗教認識論にまじりての門口であり、宗教認識論は宗教心理學によりて絶えず興奮せざる限り行く、「かくの如くにして心理學と認識論經驗論と合理論とが各自の權利を認めらるゝとさき始めて宗教學は宗教に關する學となり、學に依て宗教を代用せしめるものでもなく宗教に反對する學でもなく或は單に宗教を叙述するものでもなくなる」、然して又「宗教生活を批評し之を規則立て、之れを自己のうちに深め發展させることを保證する」宗教學が成立する。

以上トレルチの方法論的思想は大體に於て承認せらるべきであらう、然しワオバミンも云つてゐる様に、宗教心理學を基礎とする認識論の成立は、要求として何如にも正當であるが、併しそれは要求に止る。もし我々は、然らば如何にして此の要求を爲し送けるかといふ問題になれば種々なる困難が起つて来る。又彼は非合理性を承認する。併し純粹非合理的心理學的なものゝ誤謬又は假象と呼ぶのは何如であらうか。カント已に道破してゐる様に誤謬といふも已に先天形式的基礎に依存する、單なる非合理性は誤謬でも假象でもない。従つて現實なる宗教生活は合理性と非合理性の戰によりて成立するのではなくて融合によりてこそ成立するのであらう。

著書の紹介批評としては自分は餘りに多くを内容紹介に費して仕舞た。而も肝心の譯文に就ては、不幸原著参照の機會を得なかつた。此點譯者に對して寛恕を乞ふ次第である。ともあれ可成に

讀み難い原文をこれだけに譯し上げた譯者の努力と心遣ひは翻譯の經驗のない我身にも同感する事が出来る、それに譯者は懇切にも現代宗教思想を觀る爲の重要な参照書目及カント研究用書目を追加補充してなされる、是等は更に進んで研究せんとする人々にさつて大きな便宜を興へる。自分は小さなものではあるが現代宗教思想史上に於て見逃すべからざる位置を占めてゐる、此書が有名な譯者を得た事を喜ぶのである。東京大村書店發行（佐保田鶴治）

批判的教育學の問題

篠原 助市著

學としての教育研究が表はれてから約百年、其間讀書の選擇に可なり腦を絞られならぬ程に澤山に研究が發表された。けれども其多くは價値を無みする自然科學的研究が根底曖昧なる獨斷かである。眞に我々をして首肯せしむるに足るものとは獨逸で出版された二三種にすぎない、それでも未だ理想とは云へない、實驗的事實を多數に網羅したものは教育の實際家に取つては至極重要に見ゆるも其根本問題に觸れざるを以て齟齬點睛を失するの怨みあり、廣汎なる哲學的背景を以て組織されたものは安住地を得たる感を起さしむるも實際家に取つては縁遠き失あり。兩者を兼備したものの出現を望む事可なり久しき間であつた。

著者は嘗て小學校長たり、高等師範を卒業して師範附屬小學の主事たり、其間に師範學校用教科書教育史、心理學、論理等の著あり、後京都大學にて哲學を修め、卒業後大學院に入りて勉學を續けらるゝ、事三年、後東京高師教授となり、今は某大學の教授

たるべく外遊中である。理論と實際とを兼備した氏程の人は東西共に當代稀に云つても溢美ではあるまい。而して氏が大學卒業後外遊迄にものされた論文を集めたものが此の「批判的教育學の問題」である。

本書を讀み了つた時久しぶりに學術的の書を讀んだといふ感じがした。大旨の雲霓を得たといふ感がしたけれども只それ論文集である。全體としての組織に立てぬない、大綱だけを捉へて細目には互つてぬない、此れが若し全體として組織立ち細目に迄説及んであつたならば讀者はどんなに喜ぶであらうふと思つた。

内容は一、最近の教育理想、二、生活準備と連續的發展、三、社會的教育學の概念、四、教育即生活論、五、創造的自由活動と類化、六、個性と教育、七、自由と創造と教育、八、教育の根本原理としての辨證法、九、學習動機としての論理的確信、十、愛と教育、十一、ゲューイの教育論の十一項に分れてゐる。立脚地を新カント派に取り教育學の根柢、理想論方法論迄にも論理を展開して行つたものである。

著者は今紕着にあるとか、やがて獨逸に渡らるゝ事だらう。そして獨逸派の哲學者にも遇はれ、一層廣汎な哲學的背景を有せらるゝ事になる事と信ずる。序文にある如く之は氏の一里塚である一里塚迄追付いて來た自分ば更に第二の一里塚迄追付きたいと非常な興味を以て其建設を待てゐる。

世の教育學者、實際家にして學的根據を要望する人に切に一讀を奨む。定價參圓五拾錢、寶文館發行(伊藤猷典)

寄贈書籍雜誌

宗教的理性

京都 金子大榮著
中外出版株式會社

華嚴哲學研究

東京 龜谷聖壽著
會

現代哲學への道

東京 川合貞一著
東光閣書店

哲學雜誌、丁酉倫理講演集、心理研究、東洋哲學、日華公論、
教育研究、内外教育評論、學校教育、教育、教育學術界、教育時
論、國際聯盟、教育界、精神運動、文化運動、三田文學、藥王樹